

# あーすフェスタかながわ 2016 外国籍県民フォーラム

## 外国籍の子ども高校進学を考える ～外国籍県民かながわ会議の提言から～

日時：2016年5月14日(土) 13:30～16:00

会場：あーすぷらざ 2階 プラザホール

コーディネーター：山野上<sup>やまのうえ</sup> 麻衣<sup>まい</sup>

来場者数：49名

司会：本日はあーすフェスタかながわ 2016 にお越しいただき、誠にありがとうございます。ただいまより、「外国籍県民フォーラム外国籍の子どもの高校進学を考える～外国籍県民かながわ会議の提言から」を開演いたします。

本日の司会を担当します、私、金泰崇と申します。よろしくお願いいたします。(拍手)  
では初めに、フォーラム部会長の中村ノーマンよりご挨拶をいたします。

中村：みなさんご来場いただきありがとうございます。カナダ国籍の中村ノーマンです。あーすフェスタかながわは多文化共生をみんなで育てる企画です。私たちフォーラム部会では、多文化共生を啓発することが私たちの役割だと思い、3つの企画を行います。今日の外国籍フォーラムが1つ目の企画、それから、明日、午前中に子どもたちの中のティーンズの声を聴く、ティーンズフォーラム、さらに明日の午後は中学夜間学級という中学校を卒業できなかった人たちを支援する取り組みです。あまり知られていないのでその広報をしたいということです。多文化共生とは、共にこの場所を楽しく生きて行くことができるようにするためにどうたらよいか、それを考えていくということが多文化共生の趣旨ではないかと思えます。まずは、知るというところから始まり、知ったうえでそれを受け入れていく、受け入れていこうとするその中で、何をしたらいいか、受け入れていこうとすると必ず何か違和感があります。なぜかという日本は均質な社会なので、多様な人々を受け入れていくという土台ができていない、多様な人々を受け入れていくために、多文化共生を啓発するということが必要になります。

このあと、高校進学の話をしていきます。高校の在学率は、外国籍の子どもで34%という調査結果が神奈川県が発する外国籍県民かながわ会議の報告書に載っています。日本の高校進学をパーセンテージにすると97%です。ここに数字が土俵は違うけど、このギャップがどのようなことなのかを考えていこうと思っております。最後まで皆さんにご参加願いたいです。今日ここまで足を運んでくださった方にはぜひ、多文化共生とは何か、お考えいただき、私ならこんなことができる、こんなことをしてみたい、自分が行動することを考えてもらえればと願っています。ぜひ、グループディスカッションの時には、会場にいる全ての方がテーブルの方に移動して参加していただくととてもいいのではないかと考えております。もちろん、近くで聞くというだけでも良いと思います。以上を私のあいさつとさせていただきます。ご来場ありがとうございました。本日はよろしくお願いいたします。(拍手)

司会：それでは本日の外国籍県民フォーラムをご紹介します。プログラムの内容は、第一部、第二部の前半が講演、後半は意見交換と発表からなっています。第一部で、外国籍県民かながわ会議の第9期委員長に会議の紹介と県内の高校進学の取り組みについてお話をいただきます。第二部では山野上麻衣さんに報告を受けた講演をしていただきます。第三部は本日のメインで第一部の内容を聞いて多文化共生を進めるために一人ひとりには何ができるかを話し合い、グループごとの模造紙に意見を記録します。第四部は3グループを選んで発表してもらいます。その後、教育関係者のコメントと講師の講評をもらいます。それでは講師の山野上麻衣さんをご紹介します。

山野上さんは大学卒業後、浜松市の外国人の子どもを対象とした就学対策事業、カナリーニョ教室で働き、多

くの子どもたちや、その家族と出会いました。ここあーすプラザ外国人教育相談コーディネーターを務めました。その後、全国の外国人の子どもを支援する、国際移住機関 IOM に文部科学省拠出、定住外国人の子どもの就学促進事業を担当しました。外国人の子どものいる家庭に寄り添い、様々な問題に向き合っていました。本日は神奈川県に取り組みに関するご意見をみなさんとお聞きしたいと思います。では、山野上さん一言よろしくお願い致します。

山野上：ただいまご紹介いただきました、山野上麻衣と申します。今日はノーマンさんや私の話は前座で、みなさんのディスカッションの部分が本番だと聞いておりますのでそこに向けて整理をしたり、問題提起をしたりできるといいかなと思っております。よろしくお願い致します。(拍手)

司会：テーブルには、第三部のグループディスカッションで進行を務める方々がおります。お立ち願います。今回多くの若い方が進行にチャレンジしていただきますので、進行へのご協力をどうぞよろしくお願い致します。(拍手)

それでは第一部、あーすフェスタかながわ 2016 フォーラム部会部会長である、中村ノーマンより、外国籍県民かながわ会議と県民会議の教育に関する提言の紹介、および、現在の神奈川県の進捗状況などについて報告をお願いいたします。

中村：現在、外国籍県民かながわ会議は第9期ですが、その前の第8期で特に教育に関する提言に取り組みさせていただきました。皆さんに考えて欲しいと思い、このフォーラムの企画をさせていただきました。自分で、企画して、話し手になってしまいましたが、とても大切なメッセージがありますので聞いていただきたいと思います。

神奈川県の概要というと910万人で今日の時点だと17万4千人の外国人登録があるということを副知事がお話していました。国籍の構成は中国、韓国朝鮮、フィリピンと続く構成で、多様な人たちがいるということです。よく聞かれることですが、何で外国人が日本にいるのかという疑問が湧くようです。しかし、一言では語れません。様々な背景があって、今、日本にいるのです。第二次世界大戦の前に、自分の意思でなく来るしか道がなかった人もいますし、近年日本側から働きに来てくださいという形で来た方もいます。子どもにおいては、自分の意思が考慮されないケースが多いです。私の場合も、家族が渡日するので、来るしかなかったです。神奈川県では、そのように多様な人たちがいて地域を構成しています。地域を構成している人たちに対して、行政としてのサービスをきちんとしていかなければいけないという考えがあたりまえになっています。そのためにも、かながわ国際施策推進指針を策定して、定期的に見直しております。この指針の中に、神奈川県が設置した、外国籍県民かながわ会議が、体制の一部として、位置づけされております。外国籍県民かながわ会議は平成10年に設立されて、今に至っております。構成は、委員の数は20人、任期は2年、条件は国籍が外国であるということです。帰化した難民の規定もあります。特徴を紹介します。日本の審議会は何について話すかは指定されてなく、委員が自分たちの感じている生活の課題を取り上げています。また、会議の運営についても自主的に行います。会議の仕組みは、公募して委員となり、自分たちでテーマを設定して、調査審議して、提言を検討し、知事に提言を提出します。神奈川県の大きな特徴は、施策化の状況、提言を受けて、それがどういう状況にあるかということと定期的にホームページで誰でも見られる場所に公開しています。外国籍県民と多文化共生を真剣に進めようと取り組んでいるということだと思います。第8期は自主運営の特徴が出た期です。多くの学習会を実施することで、多くの意見を知ることができています。高校における教育に関して、個人の意見を部会の意見にまとめ、全体議会で会議の意見として早く骨格をつくりました。さらに、提言の意義を検証するために、県立高校にアンケートを取り、約90%の回答率を得ている。得られたアンケート回答を分析し、確認とブラッシュアップできました。このことは会議に柔軟性がある仕組みだからできたことだと思っております。その後さらに、全体会議の提言の素案を作り、オープン会議などで県民の意見を聞き、提言を完成させて、知事へ報告しました。写真は知事に報告書を提出した時の記録です。教育に関する提言が多くあったことから教育長にも会議から直接報告しました。このことは、決まったことではなく、会議の要請に対して行政が応えてくれました。教育長に報告したことが私どもの中では神奈川県の高校施策を進めるときに大きな推進役になったと自負しており、本日の報告でも皆さんと共有したいと考えました。会議はテーマを決めて、調査や情報収集をした上で、議論し、提言としてまとめて行きます。また、広く意見を聞きます。その中で、地域の諸団体の意見を聞いたり、もらったりした意見から、学習を深めるための学習会を開きました。

外国籍県民かながわ会議はこれまでに104の提言が出ています。分野的には大きく分けると、教育と社会生活に関する提言になります。約半分が教育にかかわることで、多くの外国籍県民は、子どもたちの教育にかかわる関心が高く、むしろ子どもの将来に不安があるということを表す数字ではないかなと思います。会議の成果は、提言から施策が実際に実施されています。外国人居住支援システムやすまいサポートセンターができたのは、第1期の提言からできています。すまいサポートセンターでは、住まいだけでなく、暮らしや生活の困りごとの相談を行っています。このあーすフェスタでもすまいサポートセンターを中心に相談のコーナーもできています。また、医療通訳派遣システムがあります。これは病院に通訳を予約して派遣するという制度です。公立の高校の入学については第2期から提言が出ていて、2014年から、継続的に外国籍の生徒を受け入れる制度の定数の増員を神奈川県教育委員会は行っています。会議は、地域への参画ということも実施しています。あーすフェスタかながわで会議を説明つきで、展示しています。また、各種団体の研修に呼ばれ、外国籍県民の抱えるさまざまな課題を紹介しています。

会議に参加するだけでなく、現場を持っている委員がいます。高校進学支援というのはいろんな方との出会いがあって、その中で多くの困難を知ることから高校が本当に大きな壁だということに気づきます。また、学習支援していく中で、多くの場合、子どもの貧困という問題が見えます。これは日本社会全体として、見えないから解決されない問題であることに気づかされます。会議の中で、何かできないかという思いで発表しています。提言というと問題を出すことにばかり目が行きます。しかし、神奈川県を誉めることができないかということも考えることもあります。このあーすぷらざにありますが情報フォーラム・映像ライブラリーが他が見習うべき多文化共生の図書館であり、展開してほしいということを神奈川県に提言でお願いしています。

高校進学の話を少し具体化していきます。高校進学といういつ来たとしても高校に入るのは非常に大きな壁です。普通にある生活が、高校以降は夢の状態だと考えます。高校に入れる環境の中で、高校生活をしている人たちが30%台というのは、日本人が97%の進学率という中では、まさに夢状態です。義務教育年齢のあとの人生の選択肢や生活設計では、納税者になれるはずが、非常に困難だということでもあります。高校はそれだけ大きな役割を果たしているが壁にもなっている。外国人にとっての課題は、子どもの日本語力、それから、日本社会の理解不足、そもそも高校に向けて準備をするというのが不足するということがあります。日本人と異なる家庭環境であることから、家庭にある問題についての取り組みも重要です。子どもの学習については、一般には学校の中で教育と家庭での教育があたりまえにできることが、前提になっている教育設計です。しかし、日本の教育を知らない、日本の教育でなされる中身を知らない、となると家庭での学習をどうしたら良いか分からない状態になります。特に経済的に困っているようなときには誰に相談したらいいのか、どこか助けてくれるところに助けてもらおうと思っても、非常に難しいです。両輪の一方の教育の中での支援は受入れ時に、週に数時間対応してもらえただけというのが今の教育の実態ではないかと思います。今後の成長に必要なものはなく、外国人の場合、よく話せるよね、だから大丈夫だよ、話せるからよく分かるよね、と支援が止まります。話すだけでは学ぶことはできない、読むこと、書くことが必要になります。そのために必要な言語が違ってきます。抽象的な概念を表す言葉を知らなければ学びは進みません。例えば貿易という言葉をわかりやすく説明できますか。きっとボールペンとか鉛筆とかものを見せれば説明できるけど、見えないもの抽象的なものは見せられません。それから、実際学習というものは重ねていくと、抽象化していくというプロセスでもあり、学習というのは様々なハードルがあります。さらに多様な子どもたちなので、日本語だけでは自分を見失うこともあるので、母語を大切にしていけることが必要になります。

高校進学に関する提言ですが、第8期で出した提言9「在県外国人等特別募集の基準を見直して、来日後の期間の延長と定員の増加を同時に改善する」という内容です。また高校の配置についても見直しをして、本当に日本語指導が必要な子どもたちがいるという統計結果を活かして配置し直すということを書いています。これまでの期では、増員するという考え方から、必要に応じてという考え方に変わっています。高校に対して行ったアンケートを通じて、デジタル化した調査の結果を有するというところから行いました。現在高校に在学している外国籍の生徒の30%以上が日本語の指導が必要であります。また、高校学校に入るにあたって在県枠高校の仕組みが大きく寄り添っているという2点を強調しておきたいと思います。

高校にはいろんな支援がありますので、紹介します。先ほどの在県枠高校ですが、受験科目数が3科目になり、学科成績と面接だけで選抜する、中学時代の成績の影響を受けないことは重要です。それから、入ればいいわけではなくて、入った後に教科の取り出し授業、その取り出し授業の中に日本語が含まれています。教材の工夫が行われ、ルビふり、外国語を使つての拡大図やイラストなど、授業での工夫でグループワーク的な作業をしています。第2言語としての日本語をもっている人を対象とした教育を行っています。

高校に入っている外国籍の子どもの内、在県枠のある高校に55%の子どもたちが入っています。外国籍県民

かながわ会議の措置状況から成果を見ていきます。在県外国人等特別募集の条件緩和が2008年度に行われて、3年以内のカウントが2ヶ月改善されました。この期間は、日本国籍を取った元外国籍の期間カウントでもあります。神奈川県教育委員会は、増員を図ってきました。特に近年は毎年増員を図っています。神奈川県全体の高校改革の中で、在県校高校が変更されています。みなさんすぐに想像できると思うのですが、人口の多いところにより多くの学校が必要だということが実現しました。多くの方が提案して来ました。在県校の高校は神奈川県だけでなく、横浜市も設立しているのですが、来年度からは学校数が増えるということが公表されています。取り組みの結果、在県校の高校が増え、在県校の定員数が増加して生きています。しかし、定員数を増やすと倍率が上がってしまうという状況です。

2017年度からは横浜市の学校数を含めて13校になりました。一方、必要に応じてという考え方からかどうかはわかりませんが、在県校高校ではなくなった高校もあります。しかし、人の多い県東部の強化が2017年度の受験から図られています。今までできていなかったことができた、大きな成果だと考えています。この外国籍県民かながわ会議もかかわらせていただき、高校の課題について県の知事、教育長に直接説明させていただいたことで、この外国籍県民かながわ会議がもしかしたら社会の役に立ったのではないかと思いますし、神奈川県には感謝したいと思っております。

私の経験から、継続的に努力し、ネットワークをつなげていくことで世の中は変わるかもしれないという希望を持っています。最後に1ページだけ紹介させていただきたいのですが、知事との対話の広場があります。その対話の広場を進めるにあたって、外国籍県民かながわ会議に協力の要請がありました。選挙権のない私たちは、いろんな協力を行政にさせてもらっていますが、知事への協力ということを依頼されたということは大きな驚きがあり、神奈川県にとっても感謝しております。以上で私の話は終わります。

司会：ノーマンさんありがとうございました。続きまして第2部、講師の山野上麻衣さんからお話を伺います。山野上さんお願いします。

山野上：改めましてよろしく申し上げます。山野上麻衣と申します。初めにですが、この会場にはおそらく神奈川県の外国籍の子どもや高校進学に関しては、その道のプロの方がいらっしゃるって、この中で私の役割とは何だろうということなのですが、今中村ノーマンさんからお話があったことを広げたり、深めたり伸ばしたりしながら、次のディスカッションに結びつくように理解を深めていければということに役割があるかと思っていますのですが、そのためにすみませんが教えてください。神奈川県でなくてもいいのですが、外国籍、外国につながるのある子どもの支援をされている方、この中でどれぐらいいらっしゃいますか。10人程度、ありがとうございます。直接的な支援にかかわらず、外国につながる大人も含めて、何らかの支援活動をされている方、そういう方もいらっしゃいますね。ありがとうございます。在県校という言葉が昨日までの間で、すでに知っていらした方。この状況を踏まえてお話しさせていただきます。

今お話にあった外国籍県民かながわ会議の前提の部分の補足を少ししていきたいと思えます。外国籍の住民の会議というのは神奈川にだけあるというものではないです。ただ、川崎が初期に始めたとか、ある意味神奈川県では歴史は深いのですが、なぜ、こういうものがあるかということ、外国籍の方々には選挙権がなく、そういう人たちの声をどうやって行政の施策に反映させていくかということから始まっています。現在、形としては多くの自治体で取り入れられており、珍しい話ではなくなってきています。しかし、形式的に、年に2回集まりましょう、このときだけ集まって、その場でやりたいことだけを言って終わりにするような状況のところが多いのではないかといろいろお話を聞く限りでは思っていますが、神奈川ではそうならないというのは、力のある委員がいることや、行政の方、事務局側の努力もあるのだろうと思えます。ただ、一般的にこうして集まった代表者会議の代表制をどのように考えるか、広く捉えると代議制民主主義をどう考えるかということにつながってくるのですが、この絵の中のオレンジの を外国籍の住民全体とすると、代表になる方が誰を代表しているのかという問題で、勿論国籍とかにも仕組みとしては配慮されているところが多いのですが、日々の生活のことだけでいっぱいいっぱいであったり、議論をするわけですから、日本語の能力がそこまで達していなかったら、なかなか会議という場に出て来られないわけです。ですので、相対的に困っていない人々がどれぐらい、全体の代表になれるのかという問題はどこでもあります。また、相対的に困っていない人々と、ものすごく困っている人々の間には案外、日常的な接触がないことが多く、子どもの貧困ということが今すごく議論されていますが、身近な所で、じゃあ、あの子は？という直接的な支援活動をしていない限り、どういう感じなのだろうという状況だと思います。さらに、接触が薄い中で困っている人は声を上げにくい、自分の声が価値のあるものと思えないと

いうところがあって、その中で助けてとも言えないし、ここを変えるべきだと言うこともなおさら言いにくい。その中で、どこまで全体像を捉えられるかということがこの代表制の限界でチャレンジしなければいけないという意味で、限界という言葉を使っています。

神奈川の会議の提言が優れているところが、限界にチャレンジをしようとしているところで、各種制度の理解の上に提言がなされている、ここがなかなかされていない外国人住民会議が多いような気がします、きちんと勉強した上で進めていること、日々の接点が困っている人とならないというようなところも、どう埋めるのかというところで、日々の支援活動に携わっている人が委員をされている、支援者間のネットワークを大事にする中で、こういうことで困っているという情報が入ってきており、そこをもとにここが問題ではないか、という問題意識をもっていること。なおかつ、この分野はなかなかデータがなかったりするのですが、そのないデータを一生懸命収集していること、それが的確であることがあって、提言に具体性や説得力をもたせているものだと思います。提言はなかなか大きく、実現は道のりが遠いだろうと思うものと、比較的取り組みやすいのではないかなと思うものが並んでいるのですが、その中でも、提言の中で何が壁になるだろうということを考えていくことが実現に向けては必要であるわけです。今日はその中でも特に高校進学についてということを考えていきたいと思います。

神奈川県では「外国につながる子ども」という表現を大事にしています。外国につながる子どもというのが何を含んでいるのか、外国籍の子ども以外にどういうところを想定しているのかという話なのですが、同じような困難を抱えがちでも、外国籍の子どもと括ってしまえば見落とされてしまう子どもたちがいるのではないかという問題があるのではないかという考え方が、神奈川県の中ではあります。日本国籍と外国籍の人との間に生まれた子どもがいたら、きちんと手続きをしたら日本国籍を得られるわけです。こういう人はテレビとかでもよくハーフと言われますが、ハーフという半分という言い方をするとちょっとねという当事者もいて、ダブルとかミックスという表現もあります。この人たちが、国籍が日本であると、いろんな統計には出てこないわけなのです。いずれかの親が日本人だったら問題ないのではないと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、つまり、片方の親が日本人で、日本語も出来て何が問題なのと思われるかもしれないのですが、国際結婚をした後の子どもが育つ環境というのはとても多様で、子どもを育てるにも、日本人でも、近くにおじいちゃんおばあちゃんがいるかどうかで、子育てのしやすさが全然違い、なかなか頼れる人たちが周りにいなかったりする中で、子どもは母国の両親や親戚の中で育ててもらおうという中で育つ子どもがかなりいます。しかし、ある程度大きくなって一緒に暮らしたいという時に、こういう子どもの言語や文化の大変さというのは、外国籍の子どもが日本に来ると言う状況は全く同じで、そこには差はありません。また、子どもが生まれた後どこかの段階で離婚して、お父さんは日本人だったのだけれども外国籍のお母さんが一人で日本社会のなかで子どもを育てているということがあります。日本語があまり喋れなかったりして言語的にも大変な事が多かったり、頼れる人が本当にいなかったり、頼れるはずだった旦那さんがいなくなってその親戚などにも頼れなくなりますよね。そのため、かなり社会的に孤立をしてしまうことがあり、日本のシングルマザーの貧困率も世界的に見て突出している様ですが、経済状況なども含めて、様々な困難があるということです。この人たちの数がよくわからないのですが、これは出てくる統計を拾った程度のものなのですが、例えば2014年に神奈川県で生まれた子どもの中で両親とも外国籍の子ども、つまり子どもも外国籍をもっていて日本で生まれた子どもは、1458人。他方で子どもは日本国籍をもっていて、お父さんか、お母さんが外国籍である子どもというのは2000人近くいます。1987人、後者の方が多いですね。国に帰ったり、新たに国から来たりなどいろいろな動きがあると思うのでこの人たちがずっと神奈川にいるというわけでもないのですが。ちなみに今回ついで見えてみましたが、今の高校生年齢の子どもたちの頃はどうかだっただろうというのを見ていくと、2000年に神奈川県で生まれ子どもたちのうち両親とも外国籍は、1773人なのですが、片方の親が外国籍の子どもは実は同じぐらい、約2000人います。この子たちが今どうかというのはよくわからないのです。日本語指導が必要な子どもというところには日本国籍の子の数を取っていますのでそういうところにぱらっと現れたりはそののですが、ちょっと状況が分からなくて、こういう子たちの中で支援が必要な子は必ずいると思うので、現状を分かっているけれども、この状況を把握していかなければいけないのではないかという話をさせていただきました。

高校の在学率が3割ぐらいというお話がありました、少しだけ違う数字を使いながら全国との比較をしていきます。まず、全国の高校の在籍状況の話です、これは何をしているかというと、3年前中学生だった人が今どれだけ高校に在籍しているというところで、ただ、外国人の数は増えているので、同じ学年の人が3年後には10%増えているという状況なので外国人に関しては人口の増加率を掛けて見たのですが、全国で見たときには、全体が9割を超えていて、外国人は半分の52.5%という結果になります。この数字で見ると半分の人たちは高校に行けない。神奈川県も通信制が入っていないためその誤差はありますが、全体は約9割、3年前に中学校に行っ

ていた人たちは高校に行っている中で、先ほどの数字は高いですが、外国籍の方が68%で全国と見比べるとかなり違っています。全国が52.5%で外国人が68%ということは15%全国よりも高いということがこれで分かります。統計を見ていて気になったことなのですが、外国人生徒の在籍数の公立対私立の比率が神奈川県、4%、そんなばかなという感じはしますが、59人しか私立に行っていないということはないのではないかと気がします。ちなみに全国で見ると進学率33%で全国の日本人全体を含めた約3割が私学なのです。そのため、この4%って何だろうと少し気になるころなのですが、ちなみに神奈川県の高中生全体の私学率も約3割で全国的な傾向と同じです。普通に考えると、神奈川県の公立、県立の高校は意識高く頑張って外国籍の子どもを把握しようとしているが、私立の方はあんまり把握していないのではないかとというのが印象としてあります。ただ、神奈川県では同時に外国人の生徒が他県よりも公立高校に入りやすいのではないかとこの見方も出来て、おそらくこの両方ではないかというような気がします。他のところを見ようと思ったら、私の探し方がいけないのかもかもしれませんが東京、愛知がダメだということは一概に言えないのですが、高校在籍の外国人の数がちょっと見つからない。大阪、静岡も全部で3割ぐらいなのですが、中学生の数と高校生を数の差が他の県を見ると気になるころであります。以上のデータから読み取れることとして、神奈川県というのは全国の中で見ると相対的に外国籍の子どもが高校に入りやすいし、なおかつ入るだけではあまり意味がないというか、通い続けられるということが一番大事な事で、今進学率ではなく、在籍率というのを見ていくので、通い続けやすい県でもあるということが言えると思います。このことに関しては神奈川県が誇るべきことだと思います。

何がそれを可能にしているかということそれは入り口としての在県枠と中村ノーマンさんもおっしゃっていましたが、入試特別枠や高校に通い続けるための支援活動が高校の中でなされているということが背景としてあり、自然発生的に神奈川県が素晴らしいところになったというよりは、一般市民ということだけでなく、行政と区の市民意識の中で市民として私はこう考えるということが高いのだと思います。同時に学校の努力、教育行政の対応がそろったことで可能になっているものと考えられます。なので、ここまですごくいいことだと思うのですが、ただ、それでもなお高校に行きたくても行けない子どもがいるのが現実で、それは対象となる子どもがどんどん増えているという、中村ノーマンさんから定員を増やしても同時に倍率が上がっている、これはどういうことだろうという、それは対象となるニーズをもつ子どもの数がどんどん増えていっているということです。だから、まだまだここで止まるわけにはいかない状況だと思います。

なぜ、在学率に差がついてしまうのかということなのですが、言葉が分からない、カリキュラムが違う、母国ではそんなに学校教育がちゃんとしていなかったという国から来るとか、母国と日本を行ったり来たりしている間に学校に行っていなかった時期があるとか、あるいは子どもと保護者と学校の三者それぞれのコミュニケーションを取る難しさがあるのですが、直接支援していると学校の先生に「あなたは、高校行けないよって言われた」という訴えが外国人の方から結構あるのです。それは頑張れという意味だったのではないかなと思われる文脈もあるのですが、あなたは高校行けないよと言われた時に、実際に高校に行っていない外国人の子が沢山いると、行けない、無理なのだとか保護者の方もがっかりして、働くという方向に流れてしまうなど、それはたぶん、学校には悪意はないのだけれど、コミュニケーションの前提がずれていて、結局のところ子どもの進路というのが狭められてしまうというようなそういうコミュニケーションの難しさがあるのだと思います。それは中学校段階で検討されなければいけない課題だと思います。あとは、日本に来たばかりだと、日本語が分からなくて友達ができないだとか、授業についていけないとか、高学年になればなるほど、中学生とかで来しまうと、本当に気持ちとして学校頑張ろうと思いつけるのは難しいと思います。頑張って勉強したら何とかなるかもしれない、と思える子は、すごく強い子とかその子の親の励ましもあるという状況だと思います。やはり、中学生とかで来てしまうと友達を作るのは日本人の転校生でも難しいのですが、言葉ができないならなおさらで、なかなかそういう居場所のなさ、子どもが頑張るための基盤がないというような状況にある子も沢山いるということです。あとは生活の不安定さ、保護者の就労状況というのが極めて不安定である場合が多いということから発生する見通しの立たなさで、もう帰ろうとか、仕事があるらしいから愛知県に引っ越そうとか、やはり親が大変そうだから高校行きたいと言ってはだめかなと子ども自身が思ったりなど、そういう状況にあったりします。また、先ほどのコミュニケーションの課題にもつながるのですが、家庭から得られる資源、励まし、情報というようなものにも差がついてしまう、こういういろいろな状況が重なる中で高校入試という大きな壁を乗り越えることが難しく、必ずしも受けて落ちたというだけでなく、受けること自体をあきらめている人もいるので、落ちた人の数だけ見ていっても、ちょっと見落としているところがあるかなという気がします。

高校進学に当たってのそれぞれの困難なのですが、中学生で来日してしまうと、おそらく在県枠ではもともと想定していると思うのですが、先ほど申し上げたように中学校に入っていく困難が、学校生活の面でも学習の面でもあって、高校に受かるぐらいの力をつけるということがとても難しい。在県枠ではカバーされていないお話

を少ししますが、日本で生まれたり、幼少期に日本に来ていたりすると困難が非常に見えにくいのです。中村ノーマンさんのお話もすごくさっとありましたが、何となく日本語ができて、何となく周りを見て合わせて学校生活の中で浮かない存在であることができるけれども、それと学習がしっかりと出来るということはまた別の物であるということです。

3点目として学齢を超過して来日して、これも在県枠に該当することが多いと思うのですが、つまり、16歳とかで日本に来て、高校行きたいなと思った時にとりあえず学齢期のお子さんだと中学校に行きましょうという対応になるので、中学校が進路指導しましょうということになるのですが、学齢を超えて来てしまうとまず、情報につながらないので、最終的に紆余曲折して県教委につながるということもありますが、そこまでが長かったりして、その情報につながりにくさというところが、また進路指導をしてくれる人がいないというところの難しさ、同時に母国で中学校を卒業していると日本の中学校に入れませんので、学習する場がなく、こういう子どもたちが多い地域においては学校という制度の外で、フリースクールという形で頑張っている方々が神奈川県にもいらっしゃいます。

ここから少し話を深めていきたいと思いますが、高校は誰のためにあるのかという視点でこの問題を考えていきたいと思います。中村ノーマンさんのお話にもやや重なるのですが、在県枠とはなんだろうというところで、少し補足説明を加えたいと思います。正式には在県外国人等特別募集、これは都道府県によって呼び方が違いますので、同じような仕組みがあるところでも違う名前だったりするのですが、神奈川では在県枠というふうに言っています。中村ノーマンさんからもありましたが、英、数、国の3科目で理、社を受けなくていいというのが1つメリットです。それと面接があります。試験問題がやさしいわけではなく、日本人と一緒になのです。この制度の1番のポイントは日本人と競争しなくていいという点です。中学生年齢で3年以内に来た他の外国人との間での競争だけだということなのです。日本人と競争したら、まだ日本に来て1、2年の子に日本人よりも高い点数を取るとことは明らかに難しいではないですか。だから、特別に同じ様な状況の外国人の間での選抜にしようということで、カタカナでアフーマティブアクションと書いてあるのですが、不利な立場にある人たちを応援していくような措置の1つということ。それと神奈川でもう1つ、とても大事な点が、この在県枠という枠があるのですが、その中で神奈川県では、定員内不合格が出ないのです。つまり、10人の枠があって受けたのが8人だったら、成績8人目の子が0点であってもとりあえず受け入れて、受け入れた上で支援をしていくという考え方になっているということです。これがあることが、神奈川県で外国人の子どもで進学する子が多い、大きな要因だと考えられます。勿論在県枠の数自体、ニーズに合わせて、一生懸命、学校の数も定員の数も増やしてきたという歴史がありますが、なおかつそれでも足りているというわけではなくて、かなり多くのニーズがあるが受けられない子がいるのではないかと、という提案もあったりはするわけですが、この定員内不合格を出さないことの意味に対する社会的な合意というかこれをどう考えるのかという点ですが、パワーポイントの中には適格者主義という言葉が挙げたのですが、昔は高校に誰でも行ける場ではなかったわけ。1960年代の高度経済成長期とかはかなり都道府県によって差がありますが、やはり、高校に行きたくても行けないという子がいたわけですね。だから、比率としては、6割の子たちが高校に行って、高校に行きたいな、でも、学校の成績が良くないから、働かないと家計が困るからということで、あきらめていく子どもたちが3、4割いた時代があったのですが、高度経済成長を経て、かなりの子がどんどん高校に入っていきようになって、今では、97.8%の人たちが高校に入るようになったのですが、みんなが高校に行けたわけではなかったその時代の適格者主義、選抜によって、能力があって適格である人だけが通うべきだという考え方が、これがどの程度残っているか、というのはたぶん、かなり地域差があります。適格者主義を厳格に考えた場合には、さっき、10人の枠があって、8番目の子は0点でも入れるという話をしたのですが、50点取れないとだめだよ、高校ついていけないよ、ということで、50点切っていると、たぶん枠内でも落ちる子が出てくるわけですよ。他の県の場合はほとんどがそうです。ほとんどは、枠はありますが、その中で求める学力ラインというものがある、そこに達しないと、落としてしまうのです。だから、枠があっても機能しておらず、枠があるから子どもたちが救われるという形になってはいないわけ。ただ、神奈川県では、高校の先生たちがものすごく努力をされていると思うのですが、とりあえず入試の時点であまり出来なくても、自分たちが教えて、きちんと学べるような場を作っていくという努力をしている。そしてそれを支えるような一定の制度もあるということだと思います。これはたぶん考え方が分かるとは思います、0点の子も高校に入っているよと思える方もいらっしゃるかもしれないのですが、今、ほとんどの子が高校に進学することができるような社会になったわけ。98%だと行けない子は2%しかいないわけ。その中で高校教育の機会の保障というのをどう考えるのかというのが、考えていかなければいけないことなのだと思います。

高校は誰のためにあるのか、と考えたときに、他県や昔の考え方と言うと、勉強がしっかりできる子が入る、

そういう子どものためにある、というのが答えだったと思うのですが、はたしてそれが現実に合っているのかと  
言うことですね。他県の高校進学ガイダンスに行くと高校の先生が前でマイクをもって、「高校には日本語が出来  
ない子はいれません。」と言ったりするのですが、日本語ができない子どもは高校に行けなくても仕方ないので  
すか？日本に暮らしているのに、これからも日本で暮らしていきたいと願っているのに。あるいはですね、私立  
に進むお金がない、ないから頑張っ公立に入れるようにしたいじゃん、頑張ればいいじゃん、という子ど  
もはやっぱり、公立には受からなかったという時に、それはその子の能力とか、頑張りとかが足りなかったから、  
そういう子は高校に行けなくてもしょうがないよねということですかね？私立に行くお金がなくて、公立にも入  
れませんでした。こういうことを考えていくときに、高校は今の時代においても選ばれた人のためだけにあるの  
か、これでいいのだろうかという、こういう問いが出てくるわけです。高校進学の話に限らず、外国につながる  
子どもたちが、学んだり、育つための環境のどこに問題があって、今後どのように整えていく必要があるのかと  
いうのを今日考えていければいいと思うのですが、進学率とか、高校進学というふうに話をすると、どれぐ  
らいの数があるのかという一定の把握は勿論必要ですが、そういうことだとか、そういう子たちが高校にどうし  
て行けないのかというのに関心が集中してしまったりだとか、それは必要な事なのですが。あるいは、この子達  
は将来の労働者となっていくために何を身につけてもらいたいのかだとか、こういう話をしているときにやや抜  
け落ちていかなど。私がいつも思うのは、高校に行けなかった子どもが、10代後半というこの時間を日本社会  
の中でどういうふうに生きているのか。高校教育にはやはり、高校教育固有の役割があるわけですね。10代の後  
半は、勿論、定時制だともっと高い年齢の方もいらっしゃるのですが、そういう子たちにとって学び舎であり、  
居場所であり、そこに入れない子どもたちが98対2の割合で行けない、そういう子たちが今をどう生きている  
のかというようなことを考えるのも、高校に行くこと、通い続けることを考える上ではとても大切だと思います。

神奈川県は、日本の全国の中ではよく頑張ってきた、その方向性も恐らく間違っていないことまでは確認でき  
るのですが、では、これまでの努力の積み重ねの上にさらに何をどのように積み上げていけるのか、そのために、  
それぞれの私たち一人一人の課題だと思うのですが、外国人は高校に行けない、行けなくても仕方ないのでは  
ないかと思う市民が多かったら、制度がそちらに向かわないわけです。だから、勿論直接的に教育行政に携わっ  
ています、高校教育、中学校教育に携わっていますという人たちや支援の現場にいますという人たちにとっては  
直接的な問題であると同時に、直接関係のない市民の中で、どういうふうはこの事を考えるか、というのはとて  
も大切な事だと思いますので、ぜひぜひ、そういうことをこの後のディスカッションで話していただけれ  
ばと思います。私も一緒に勉強させていただければと思います。今日はこの後のディスカッションでいろいろと  
お話を聞かせてください。私の話はここまでで一度終わりにします。ありがとうございました。（拍手）

司会：ありがとうございました。それではこの後のプログラム、グループディスカッションに移りたいと思いま  
す。休憩時間は設けませんので、それぞれの都合で出入りしてください。お手洗いはステージ後方の左手から出  
ていただいて、1階、2階にそれぞれございます。お席を離れる場合は貴重品をお持ちいただけるようお願い  
致します。それではこれより第3部に移りたいと思います。第3部の進行は中村ノーマンさんをお願い致します。

中村：このあとのグループディスカッションを進めたいと思います。後ろの方も前の方に移動していただければ  
ありがたいです。ここは自分が感じたことを他の人と意見交換して考える場面です。進行をお願いした方も専門  
の方ではなく、一般の方をお願いしました。話さなくてもよいですが、テーブルにいた方がわたしは楽しいと思  
います。

プロフィールシートの記入をお願いします。このあと自己紹介のネタということで、これを使ってください。進  
行役の方がいるという話をしましたが、ディスカッション中は進行役の方の指示に従って進めてください。ここ  
では自由に話すという形式ではなく、自分の考えをキーワードで書いて模造紙に出していくという形で進めます。  
できるだけみなさんがたくさん発言できるようにしたいので、1回の発言は2分程度をお願いしたいと思います。  
講師を始め、こちらでお願いしている方で、テーブルの間を動く方もいらっしゃるのをご了承ください。

時間は45分、だいたい3:25くらいを目途にグループディスカッションを終えていただきたいと思います。グル  
ープディスカッションというと3人ぐらひは必要かと思しますので、ご協力をお願いします。まず、プロフィー  
ルシートを書いていただき、3:25まで話し合いをしていただき、そのあと様子を見て発表を3グループくらい  
の方にさせていただこうと思います。



## グループディスカッション 約 45 分間

中村：あと2分で発表になりますが、Aグループ、Bグループ、Cグループに3分くらいずつ発表をお願いしたいと思います。発表者がいないところは進行係が発表するようにしてください。

3:25になりましたので、次のプログラムに移りたいと思います。話が尽きないと思いますが、進行へのご協力をお願いいたします。

では、Aグループ、模造紙も形になっているようですので、前に出て発表できますか。では、皆さん聞いてください。お願いします。

Aグループの発表：5人で話し合い、大きく3つの気づきの枠ができました。一つ目が、日本国籍は日本語ができることは別ということです。日本国籍でも外国につながる子がいるということで、日本国籍は日本人と横につながるのにどう関わられるのかというのが一つ目です。続きまして、神奈川県は在県枠のある高校がありますが、地域に偏りがあるので地域に高校を分けることが二つ目です。三つ目が、国へのつながりについてです。国へのつながりをもつことは家庭における話なのですが、一人一人の状況ですね。親からどのようなモチベーションを与えられるか、どんな状況を与えられているかで、学校や学校以外の支援している団体のサポートが得られるかどうか等、どのような支援が得られるかでその子の人生が全然人生変わってくるのではないかとということです。そして、先ほど申し上げた2番目と3番目のことに関連する意見として、神奈川県内の高校進学における、先ほどのお話では私学への進学率という言葉がありました。私立にいる人がどれくらいいるかということがありました。あと、この3つの枠のどれにも入っていないのですが、山野上さんの話にもありましたが、外国籍県民かながわ会議という外国人が代表する会議に行ったときに相対的に困っていない人が外国人の属性として全体の代表をできるかという話がありましたが、それは外国人に限らず、どんな文化やカテゴリーをみても非常に興味深い指摘であったと思っていました。以上です。

中村：ありがとうございました。続いて、Bグループに発表をお願いしたいと思います。

Bグループの発表：私たちのグループは、まずは国際交流について、それから言語、仕事、これはいろんな仕事がありますね。それから、教育、このような4つの大きなカテゴリーにわけました。いろいろ細かい話もお互いにしたかったのですが、なかなかできませんでしたので、国際交流というところに話を持っていきたいと思います。国際交流というのはみなさん言葉としては「国際交流」頻繁に聞いている言葉だと思います。そして、この中で色々な人との交わりや外国の歴史・文化を学ぶことや、外国の籍の人たちに日本の歴史・文化を学んでいただくなど、そのようなことを一緒にしていく。そのような交わりなどを私たち日本人も外国籍の人たちもお互いに意識して交わっていく。そのような意味でこのあーすぷらざというのは非常にいい場所だと思います。催し物もそうですし、展示していることもいいですし、交わりの場というのも1階にあるわけです。そのような意味で色々な人が自由に出入りできるので、ここはいい場所だと私もよく利用させていただいています。そして、その中で今話題になっていたのは、ヘイトスピーチや、その宗教による排除のことです。このようなことを、やはりその交わりの中でお互いに意識するというのでしょうか、そのようなことを知ること、それが非常に大事であるということをお話ししました。例えば、みなさんご存知の通り、いつだったか浦和レッズでしたか、サッカーの球技場でヘイトスピーチが大きな問題になり、色々その後、そのことが話題になりました。そして、私の体験から、やはり私は海外のプロジェクトで様々な国に行ってきたので、いろいろな宗教に関する話を聞きました。日本を出るとき、「お前は外国へ行ったら宗教の話は絶対にするな。」そのような言葉で送り出されました。そして、私はイラン・イラク戦争、1980年代に私は10年間イラクで仕事をしていました。その時にお客さんと、偉い人とお話をする場がありました。その時にその人がこちらからは宗教の話は持ち出せませんが、相手からそのような話が出てきた時にどう対応するかで、私は困りました。「お前の宗教は何だ」と聞かれ、「私、仏教です」と答えました。そして、もう一人私と一緒にいた日本人、彼も仏教だと答えました。しかし、私は余計な一言を言いました。「私は仏教、その国だけけれど、私の宗教は無信仰です。宗教は持っていません。」と言ったら、その偉い人から「君、それは間違いだよ。」と言われました。「それは、仏教であろうが、キリスト教であろうが、イスラム教であろうが、ヒンズー教であろうが、とにかくそういう自分の信仰というものを持つことが大事なのだ。

その国が違う、その宗教がいろいろ、だめ、など言うのではない。」そのように言われ、私は教えられました。そして、このような場ですが、難しい青春時代を、中学校・高校のときに、やはりそのようなことにどこかでお互いに関心を持つというか、意識する、相手のことを理解する、知るということが非常に大事だと思います。みんな同じ人間ではありません。国も違います。思いも違います。色々あります。ですから、それを押し付けるようなことをしてはいけないということや学んでいかなければいけないということを話していたのです。すみません、他にも色々あるのですが、例えば仕事、仕事といっても色々ありますね。高校・大学も出て、しっかり国家試験も取って、それで仕事をしている人もいます。ですが、今ですが、3Kの仕事をする人もいます。それはそれでたくさんあると思うのです。その辺をお互いに認め合う意識をもつことが大事だと思うのです。すみません。長くなりました。以上です。

中村：ありがとうございました。Cグループ、お願いします。

Cグループの発表：私のグループでは、教育など、誰がどうするかというよりも、市民をどうしていくか、どのように働きかけていくか大事なのではないか、ということができました。そういう観点から色々話し合っていたのですが、これは昨日でしたか、NHKで「はんこの世界」というのですか、大久保のことをテレビでしていました。つまり、外国人が来ている、観光地だから多いというのもあるのですが、そこに来ている人たちは、みんな自分たちで出てきた人たちで、選んで、留学という形で自分の意志で来られた人たちだと言われていました。誰もがそこで経験をして海外の自分たちの国に帰ってよりよいステップアップされるという話がありました。ここでの問題はそうではない子どもたちです。子どもたちは楽しくて来ている人たちだけではない。親の都合で彼らは選ばざるを得ないのです。ですから、ここで教育を受けざるをえないと、生きていかなざるをえないと。そういう状況の子に対してどうしていったらよいかということなのです。その中で、実は私の子どももカナダに10年ほどいた時があったのですが、その時は仕事で行ったのですが、親は自分の意志で行ったのですが、子どもたちは連れられてきたからそうでない。そのときの子どもたちは日本にいる外国籍の子どもも同じ状況にあったように思います。その中で子どもたちは非常に苦労しました。子どもに対してやはり少し私は申し訳なかったという気持ちがいまだにあります。親も多少苦労しましたが、子どもはするように苦労をせざるをえない状況で、子ども3人いましたが、色々あります。高校生と中学生と小学生と、それだけでもまた大きく状況が違ってくるのですが、上の子どもたちは高校生と中学生とでは言葉に本当に苦労しました。私が想像する以上に本当に苦労したと思います。やがて、子どもの中で不登校になる子もいました。これは本当に悩みました。そのとき、本当の話で感謝している話なのですが、カナダでは本当にそのような子どもたちに対する対策が学校でよく発達していたのです。そのような子たちのために別の言語でしたが、そのような子たちを集めたクラスをもってやっていました。親もそうですが、親に対してもそういうサポートがほんとにカナダの場合はよくされていた。私は本当に感謝しています。そのようなことを通して子どもたちも息子も、色々ありましたが、ある程度ことは子どもたちのほうが早いですから、適応できていけたのだらうと思います。サポートは日本ではまだまだないのではないかと思います。比べるものではありませんが、そのようなサポートが本当に必要だと思います。大事なことは、子どもたちはやはりある意味で日本を発展させていく、日本を豊かにしていくのにもっと宝として人材として育てていく。貴重な子どもたちだと思って市民が育てていく。そのような雰囲気を作っていくことが大事なのではないかと私の中では結論としてなっていたのです。今、議員さんのなかでもそのような移民を反対していて、そんなことは必要ないということもあるのですが、やはりそうでなくて、やはり子どもたちはとても貴重な存在という考え、また市民が育てていくという、そういう雰囲気を私たちがつくっていくということが大事なのではないかとここで終わりました。ということによろしいでしょうか。

中村：ありがとうございました。もっとたくさんのグループの発表も聞きたいのですが、進行の都合上グループの発表はここまでとさせていただきます。神奈川県で高校の教育、外国人の子供の教育を支援している様々な団体があります。その中の二つの団体の方にグループディスカッションを見ていただき、それで一言をいただこうと思っています。最初にNPO法人多文化共生教育ネットワークかながわの高橋清樹さんをお願いしたいと思います。

高橋：みなさん、こんにちは。私は毎年あーすフェスタの時は、下の1階の「せかいの遊び場」という子どもたちを対象にした、いろんな国の文化紹介を二日間やっています。ネパールの帽子をかぶってうろろろしているの、今日はこのまま参りました。よろしくお願いします。今、最後のグループがおっしゃったようにまさにその

通りだと私も思います。私もずっとNPO法人、今ご紹介いただいた多文化共生教育ネットワークかながわの活動をしています。高校進学を取り組みをもう20年前からしています。県内で高校進学の説明会をしたのがスタートで、2006年の時、かながわボランティア活動推進基金21という神奈川県特有の基金制度があり、それで県の教育委員会と協働でそのような説明会をやるということになり、今は教育委員会と協働で、高校が積極的に関わって、説明会を行っています。高校の進学の問題は、まず入口の問題が最初の問題なのですが、実は入った後の問題が非常に大きくて、入った後どのように支援するかということが課題になり、2007年から、高校の方でコーディネーター、サポーターという人を派遣して学校の中でどのような取り組みを行い、どのような支援をするかということに取り組んできました。そして、それをやりながら、さらには高校卒業した後、どうするのか、卒業後に向けて必要な支援はなにかと取り組みを拡大してきました。これは実は支援というよりは、自立に向けての後押しなのです。本人たちが自立するために何をしていくかということ自分で意識して勉強なり活動なりをしていかないといけないので、なかなか支援という言葉は馴染まないです。本人たちの努力を応援する立場で関わる。しかし、そのあとで大学に入っても、進級が難しかったり、就職も難しかったり、色々なことが出てきているのです。私たちの活動は高校進学から始まったのですが、しっかりと社会の到達点に行くまでにきちんとした支援が必要だと考えて支援しています。最近思ったのは、多文化共生とは本当はどんなことなのか自問自答しています。多文化共生教育ネットワークかながわという名前なのですが、多文化共生とは「外国の人を支援すること」なのだろうか、本当にそれが多文化共生なのだろうかと考えたら、実は、マジョリティである日本人がどうしていくかだと思っています。外国につながる市民と、どのように市民としての課題を共有していくか、解決に向かわせるか、ということを考えないと本当の多文化共生ではないのではないかと。マイノリティの人のことだけの問題にしていたら解決しないのではないかと。やはりマジョリティが、「気づく」、そして問題を一緒に市民として考えるという枠組みを考えていかなければいけないということを思っています。まさに先ほどそちらのグループでおっしゃったように、やはり市民として、どのように意識を高めていくかが大事だとすごく感じています。ですから、多くの人たちと共に考えていきたい課題だと思います。最後になりますが、最近、私はマスコミというかメディアに対して考えさせられることがあります。今まではメディアに対して、メディアというのは正しい情報を伝えているのか、検証しながら臨むべきだと思っていたのですが、最近全く考え方が変わりました。最近のメディアは、市民に正しいことを知らせないようにしているのではないかと、考えさせないようにしているとも。例えばゴールデンタイムで、あんなくだらない娯楽番組ばかりしている。何にも考えない市民を育てるために、メディアは存在しているのかと。すごくそのような感覚を持たざるをえなくて、メディアに任せておけない。私たちがやはり知らないといけない、知ることを務めないといけないとすごく感じています。これで私の報告、意見を終わらせていただきます。ありがとうございました。

中村：ありがとうございました。続きまして、神奈川県教育委員会教育指導部高校教育課入学者選抜定員グループのグループリーダー及川さんに感想など、自由にお話いただきたいと思います。

及川：ご紹介いただきました神奈川県教育委員会高校教育課入学者選抜定員グループの及川と申します。本日は本当に色々な年代の方々がいらっしやっており、色々な国とつながりのある方がたくさんいらっしやるということに改めて感じました。そして、みなさんの活発な意見の中でも、特に私が気になったのは、やはり先生方がもっと制度のことを知らなければいけないのではないかと、また、入学してからの学習支援が足りないのではないかとということです。多文化共生の地域社会づくりがもっと必要なのではないかとのご意見もありましたが、色々な人がいる中で、みんなが認め合いながら生きていくことの重要性を改めて感じたところでございます。発表でもありましたが、県立高校改革ということで今年度から取り組んでおりますが、その中で在県外国人等の特別募集も見直すことになりました。先ほども説明がありましたが、5つの学校で新しく行うことになり、募集を停止するところもあるのですが、県全体のバランスを見ながら改革を進めさせていただいたところです。また、インクルーシブ教育推進ということで、障害のある子どもたちと一緒に勉強していこうという新しい制度も立ち上がっていきます。いろいろな課題もありますが、みんなと一緒に考えていくというような教育の重要性も含めて、改革に取り組んでいるところです。先ほど、高橋さんからお話がありましたが、NPO法人の多文化共生教育ネットワークかながわと協働事業をしております、日本語を母語としない生徒支援者派遣事業、多文化教育コーディネーターの派遣事業、それから、困っている生徒の支援を増やしていこうということで、学習支援員の派遣事業が今年度からスタートしたところです。教育コーディネーター派遣事業は、平成19年の4校からスタートして、今年度は16校の派遣事業を行っているところでございます。それから、今日のパンフレットにありましたが、日本語を母語としない子どもたちのための高校進学ガイダンスを今年度も行います。高校進学の制度の説

明や、高校の先生と直接話をする機会もありますので、みなさんのお知り合いについても、ぜひそういう機会を利用していただければと思っております。それから、中村さんが参加されている外国籍県民かながわ会議ですが、外国につながる子どもたちの支援に、神奈川県教育委員会としても積極的に取り組んでいきたいと思っております。また、皆様方にご協力いただけたらと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。本日はありがとうございました。

中村：ありがとうございました。最後に山野上麻衣さん、全体を通してご意見を申し上げます。

山野上：はい、再び山野上です。今日は皆さんお疲れ様でした。私のほうからは3点お伝えします。1点目はまずすみません、お詫びと訂正です。神奈川県の私学振興課の方がいらして、「私学への進学率が低いのは把握されていない子がいるのではないか」という発言を私がしたのですが、「されています」とのことでした。私立においても入学したときに国籍は日本であるか、日本でないかという点については把握されていますということをおっしゃっていて、統計の4パーセントはあそこに数字としては4パーセントですとのことでした。また、私学振興課のほうで各種学校も所管されているのですが、朝鮮学校やインターナショナルスクールや、神奈川県にはそういうところもあるので、そのようなところを含めて考えていただけると、というお言葉をいただきました。今日は触れられなかったのですが、そのようなご指摘があったということをお伝えしたいと思います。そして、2点目なのですが、往々にしてこういう会合で集まって下さるみなさんは、多少他の言語の人が混ざっていることもあるし、ノーマンさんのようにカナダ人の方もいらっしゃるのですが、やっぱり日本人の側で、支援していくというような立場の方の参加が多くて、外国人代表会議のところでお話をしたのですが、なかなか困っている当事者の声を聞くことが難しいわけです。本当はこういう場に当事者の中学生・高校生ぐらい年齢のお子さんですとか、あるいはその保護者の方にきちんと通訳を付けたうえで、一緒に話ができるといいのだろうと、理想はそうであると思います。ちなみに明日ですが、ティーンズフォーラムという企画がありまして、外国人学校に通っているお子さんが話し合いをするというものが別途あるみたいですが、なかなか私たちがそのような当事者の声というものに接近できているのだろうかということが、このような場にきて話をするたびに、いろいろなものに参加するたびに忘れてはいけないなというふうに思います。そして、3点目です。それに関わってなのですが、とは言うものの、やはり何が必要かということを考えてときにやはり異なる人、他者への想像力というのが基本的には一番鍵になるのだろうと思います。自分とは異なる立場、異なる文脈で生きてきた人たちを勝手に自分がこうだから相手にもこうだろうと考えるのではなくて、どのような道筋を辿って生きて来られたのか、だから何が違って、だけど何を分かり合えるのかなど、そんな中で何が問題とされていてそこをどう乗り越えていけるのかということ、やはりその基本となるのは想像力だと思うのです。みなさん、ここに参加していただいた方々はきっとそのような想像力があって、だから知りたい、だから考えたいと思ってここに来てくださったと思うのですが、ぜひその持っている想像力みたいなものをまた日常の中で感じるふとした疑問や、このままでいいのかという思いや、そのようなところときちんとつなげていき、毎日の生活のなかで考えてくださる方々が増えていけば、きっといい社会に向かうと思っております。本日は長時間ありがとうございました。

中村：以上で本日のプログラムは終わりましたが、あと3分くらいあるので、山野上さんへの質問を1つか2つ質問を受けたいと思うのですが、何かありますでしょうか。

では、私のほうから外国人会議の代表制という話をしてくださり、ありがとうございます。私のほうから言いにくい話なので、山野上さんが言ってくださってよかったと思います。普通の生活をしていたら、決して困っている人との関わりはないと思います。例えば、みなさん自分の代表を決めるときに、社会のすべてのことを知っているかという知らないですね。その中でよりよい代表になるためには、どのような、これから代表になりたい人がいれば、どのようなアドバイスをいただけるでしょうか。

山野上：すごく難しいことをサラッと聞かれたなという感じなのですが、代表をするというと少し大きさに聞こえるかもしれないのですが、特に日常的に支援をされている方を代弁するということはすごくたくさんあると思うのです。それは声をあげにくい当事者にとって必要なことであると思います。ただ、基本的に代表するとか代弁するということに一番大切なのは、色々な見聞きする、自分が見聞きする出来事をどれだけ相対化して、色々な大きな文脈の中に位置づけられるかということだと思います。色々な形の支援がありますが、やはり支援をしているときに自分の目の前のある事例、あるケースが、これが全てなのだということになってしまうことが多分あ

と思うのです。それは心情としてはとてもよく理解できる。ただ、もともと個々のこの形で困っている人がいるかもしれない、この人のこれが問題だから、こうしなければといったことが別の文脈のもとでは人を傷つけたり、あるいはその人にとって大事だった資源が何かの都合でつぶれてしまったり、そのような競合関係もあったりするわけです。ですから、大きな文脈の中で、今抱えている問題というのはどういうことなのだろうか。例えば、他県と比較してどうなのか、他国と比較してどうなのか。今日もディベートの中で比較して色々出てきましたが、そのように大きな中で見ると、どういうことが問題なのか、そして、その中で具体的な例として今自分が見ているものはどうなのかという、そのような相対化、構造的な文脈に置くということができるようになると、これが問題だということを発信したときにより多くの人に伝わりやすいということでもあると思います。答えになっていますか。

中村：はい、ありがとうございました。大変参考になりました。それでは、ほぼ4時になりましたので、終わりにしたいと思います。今日は長時間にわたり、本当にお付き合いいただきまして、ありがとうございました。これを持ちまして、本日のプログラムを終了させていただきます。明日もあーすフェスタかながわにて様々なイベントが行われています。フォーラム部会としては明日5階の映像ホールにて2つイベントを実施します。午前10時から11時半に外国につながるティーンたちが自分たちの夢を語るティーンズフォーラム、午後は1時半から3時10分に夜間中学をテーマにした学校の映画「こんばんは」の上映会と上映後に監督の講演を実施する予定です。この講演には夜間中学を卒業した方も参加して下さるそうです。他にも、様々なイベントがあります。よろしければ、明日もぜひあーすフェスタに来ていただきたいと思います。最後になりますが、お手元のところにアンケートがあります。アンケートをできるだけたくさん回収したいので、今から2分間ぐらいアンケート記入の時間にさせていただいて、もう一度声掛けをしたいと思います。アンケート記入よろしくお願いたします。

みなさん、2時間半にわたり、ありがとうございました。お忘れ物のないようにお気をつけてお帰りください。本当にありがとうございました。